



標
浪
多
の
ゆ
記

五

~ 13
3095
6 止



門へ 3
3095
6

昭和九年
七月二三日
購末

ゆい巻の五

曲亭馬琴

この見の酒宴

玉の方ハ薄雪姫の鈍五郎小助おとすけとて三回さんかいの妓院きいんへ賣うつとまひしとい
露つゆありもどまりひの外ほか鳥部野とりべのの危難きなんと栗門くりかど佐二さじ郎らう小救おすけりて
彼かれあがやととらも黙止もくしとていへばとてが隨意しゆい誘引ゆういんとてとまごふと
もえぬ丹波路たんぱろへおぼつうくも起おことてふ彼地かのちの路みち小松速おまつうねとち死
山やま流なが谷やもあゆくく世よ深あか踏ふの中なかあへ究竟くわうけうううとて佐二さじ郎らう玉たまの方かたは
扶引すくい釘井くわい水みづ鶏とりとつらふしと。あけた道みち芝しばられたらひつやく小産こさん
權老ごんらうの坂さか越こうとて鳥部野とりべのが徒あまふあらとやえんとて津つ四よ小助おすけと播磨はりま
路ちみゆり。晨あさあつとて夜よハ遅おそく宿しゆくりやうして丹波たんぱうら奥おく小野おの屋や

新書
巻五

下丹波と
つらんさあ
小或部大正
山の秋と
とまり



木三三
 佐三三
 伴三三
 泥三三
 赴三三途
 樵夫
 柴三三
 三三
 三三
 三三

五
 卷五

三

三
 三
 三

藤山小鬼と
 鬼といふ神人
 今の神屋
 刀玉
 今の品玉
 板下の類
 乞索児
 和名鈔本揚
 氏漢語鈔と
 引く云と云
 見保加比比
 正と見也

しくまゝと出まをききふとらうく押戴一口とくぐり又土器ととりあぐる
 たりも外の方俄頃不物思へらありと。いとむらうくきかたのとも。照を
 くら靴とお鳴らし。とらうとく躍入とて。衆皆さへいふと怪しく散動
 つととと入るふと見あまうら群く或は籠ふ物なつらぬたて冠と
 播植と笏と。面と赭塗あへく瑛羅王のお拾うるもあり。或は方相氏
 めたる假面と被り。み海多れの海と念するのみ。やうたの藍瓶小ぢり
 ころんやうふ全身まゝなる假鬼と追わく踊るもあり。又蛇と使うりの
 刀玉とるりの單相撲胸とた反故拾ひあるとありある乞索見下人のあり。
 足拍子と踏む。妙後の茶中不礼と入るも。奴婢もも。制難采れ
 果くせんまをあらうと。朝坂へさうへ。流九郎眼と睨り。這奴おとさう
 へ。うらもつべたと織た身も憚らうと。村長の空後踏あらしとを安う

唐山小鬼と
 鬼といふ神人
 今の神屋
 刀玉
 今の品玉
 板下の類
 乞索児
 和名鈔本揚
 氏漢語鈔と
 引く云と云
 見保加比比
 正と見也

ねむりも小模待酒の喫。くらの止むらう。又富といふりのゆらば。あど
 めひ森の多小くく。魔まぐく。熱ひゆらう。り。連ふ走り去らうと。ハ
 一人もけくへうと。じと罵らう。刀の鞘もあか。と。へ。見。呵。呵。と
 冷咲ひや家公。く。つ。あ。ま。と。ひ。と。佐。二。郎。と。い。ふ。人。の。鳥。部。野。の。乞。見
 あく。我。小。等。一。死。り。の。あ。る。が。子。子。兄。貴。ま。と。く。か。叮。嚀。不。款。待
 ろうと。夢く。りの吉酒と。も。あ。ら。う。聖。ら。り。の。あ。は。れ。び。と。ら。う。ふ。せ。と。て
 ありと。縦村長も。あ。は。れ。と。見。と。子。と。し。兄。と。敬。ひ。あ。ら。う。や。と。う。吾。們
 と。摩。ひ。の。らん。彼。酒。と。喫。り。も。喫。り。と。い。ふ。後。小。高。魔。王。上。坐。小。ま。ま。と。て
 へ。方。相。氏。も。假。面。と。搔。遣。捨。鬼。も。并。も。圓。坐。く。破。と。垢。つ。た。ら。揚。の
 袖。と。ち。た。の。げ。著。と。も。と。ら。う。物。鯛。と。食。ふ。の。と。鉋。子。小。口。と。さ。う。つ。け。と。
 酒。成。也。も。あり。こ。其。顔。の。む。つ。る。へ。さ。く。も。と。れ。友。ひ。と。ら。う。さ。う。が。祝。し

乞見未あき
乱入々酒食
を棄ひ啖ひ
佐了を
あう心



前々存

かしんさくかじりし声とてうりてく終ひては後小果の酒量とお破る折
 敷と踏碎た敗壞狼藉いづれもあざむる間小の酔たる奴の物仕ら
 しく臭氣方へんやうもあざむる止ま三のあかり小見えのくも見本をさ
 小いひらうやうや小送りゆりけしむば奴婢亦いりやうい小唾しく鹽を
 ららせもさし朝坂も吻と息しく奴婢小物もさうりわたつりさやさ
 りやう。佐二郎はらの年本使多れや小見の隊ふ入く在しつるふらと
 庶莫正しく佐太夫のく一子あくひとさうの母とあまのめとさめあ
 へとさうさくちし今更這奴亦恥しあまのめさうらんや。さうと一言の回答
 小も乃らど。阿容さう居あまをさめあねとさう根りども佐二郎は
 只小の額小架さう俛く應さし木三の景時亦さう朝坂は九郎小
 難ひ佐二郎のくの亦曾さく。乞食さうさめせしとさうさうらぶらぶの村の

小見ども小縁由と告く物とさし。さう後付ひまわらさうしとかくと告
 ぶと彼亦わさしとさひく。さう恥せさうとさしはし。さう為仰おぼけ
 ありぬの翌へ御人もさうさう。さうさうの家のけさうのさう。御人跡に
 難と領主へさえあまのめさう。さうの禍や出さうらん。僕もあま小
 さう佐二郎のく。さう且く何処へもさうさめせし。さう小見小父寛くぬこ
 たび迎へさうさうさう。さうさうの被ふる海さうさう。さうさうさうさうさう
 さう。さうと争とぬの常言小いさ小見と棒さうさうさう。さうさうさうさう
 蓋さうさうさうの朝坂小教びと。さうさう鞭然とさうさう。さう九郎剛方
 さうさう袖と引バ猛さうさうさうさうさう。さうさう物憂にわらし。さう三のホさう
 さうさうさうさう道は小構り痛さうさうさう。さうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさう。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

源氏物語
 卷五
 九

伏屋
産の棟
うきか
故小伏屋と
又信達の
伏屋小娘

おも嫁打井孫の家鶴とやんがら。そ被らるべしを便ひしうと告
くまのここといへ佐二郎のむとゆく。木三小侍と被奴隷とわく。松明と
うつては。後が筆をさすく。いふ。おは。夜も深かり。いふ。玉の方の旅宿
み音づとやわら。ふ。及ぶ。既ふ牛坂。頼小。到ら。比及ふ。天明。あり
ぬ。俱しく。あは。つ。奴隷の。あや。げ。ある。伏屋の。只。一。つ。あ。と。潰。ち。用。た。く
赤。囊。と。お。ち。り。し。位。せ。も。い。ら。あ。り。と。い。ふ。佐。二。郎。の。明。ゆ。き。あ。つ。ら。
ふ。い。ふ。家。の。二。間。あ。と。ど。磔。落。く。簷。朽。か。さ。つ。た。敷。き。し。ら。藤。小。雨。り
く。菌。と。生。し。曲。突。の。ほ。う。ら。湿。り。く。蜘蛛。の。網。向。あ。り。か。け。ら。う。これ。い
とも。あ。と。玉。の。方。と。つ。く。か。物。凄。れ。如。小。居。ち。から。と。げ。と。あ。ひ。く。し。つ
ら。ら。か。れ。拂。ひ。か。と。さ。る。ふ。旭。山。の。扶。小。登。り。し。う。木。三。小。侍。の。明日。又。訪。ひ。し。
さん。と。く。彼。奴。隷。と。び。く。ら。り。ぬ。佐。二。郎。の。い。と。り。つ。く。と。あ。ひ。や。ら。又。が

横死をまひし為作とぞく。小怪に。う。限。じ。え。木。三。小。侍。母。と。波。な。ら。が。う。ら。ぬ
風。声。あ。ら。う。り。と。も。り。く。知。ら。り。は。と。さ。ら。被。人。又。の。世。に。在。ら。う。ら。ぬ
似。ど。い。と。信。と。ま。く。歎。待。せ。し。り。却。不。審。牙。怪。女。の。方。と。信。ひ。進。む。と。結。母
張。た。ら。お。と。ひ。と。り。あ。ら。ん。ら。り。い。の。深。め。小。隠。せ。終。ん。と。あ。ふ。使。は。し。と。さ。ひ
ふ。し。く。ふ。さ。び。ゆ。と。ま。む。ら。ふ。何。と。き。お。持。あ。ら。り。ら。り。し。う。と。病。と。推。す。件。の
旅。宿。ふ。む。た。玉。の。方。い。さ。ら。ん。打。井。家。鶴。小。又。が。横。死。の。ゆ。え。見。が。狼。藉。せ
ら。ら。り。り。野。田。の。牛。馬。と。守。り。牛。坂。と。い。ふ。彼。小。伏。屋。と。う。ら。り。ゆ。い。と。信。ひ。物
と。ら。り。ら。り。な。り。れ。ば。妻。皆。累。と。あ。ひ。或。い。佐。太。夫。が。横。死。を。悲。し。ぬ。佐。二。郎
義。跡。が。た。と。う。ち。歎。た。ぬ。さ。く。あ。ら。づ。れ。あ。ら。ぬ。佐。二。郎。の。玉。の。方。と。扶。引
妻。女。見。と。わ。く。い。ふ。あ。ら。う。ふ。い。つ。く。煩。ひ。つ。れ。く。路。ゆ。べ。う。も。是。ね。ど。と。ん。ら。う。志
と。願。し。ら。う。ま。が。又。が。基。小。信。合。書。し。く。心。中。不。念。し。ら。う。い。又。の。横。死。全。く。蛇

源氏物語 卷五

十一

前篇

の所為ともいふはえど。一人の為小娘さとしらう。明ふその誓とさし。又
 しが身不肖あそども速小誓と報く寃魂と慰へし。や。頭ハ験えど
 と祈請し。特とらう。退り。汀井家鶏も。さう。草の花とみ向て再
 とんも。泳陀仁くと唱色。玉の方と数珠つらりて。同向志のひら。や
 て。佐二郎へ。人のこ。とけい。山。顛の家。小。立。ゆ。り。しが。大。小。登。熱。して。さ。ら
 死ぬ。べ。う。ま。か。め。さ。う。ぬ。ご。小。郷。遠。あ。る。あ。け。ひ。の。そ。う。め。く。あ。ふ。め。れ。る。多。れ
 ハ。醫。師。を。招。く。さ。ら。に。も。あ。く。汀。井。へ。い。ふ。え。ん。と。泣。ま。ふ。玉。の。方。も
 の。陽。り。あ。ひ。家。鶏。の。孝。心。あ。ら。う。の。性。究。く。怜。州。り。と。母。と。慰。つ。ま。ひ
 しく。又。の。者。病。と。ま。ら。ふ。の。夜。佐。二。郎。が。熱。氣。少。し。醒。り。も。う。驗。腫
 ら。ぶ。う。と。物。と。え。ど。透。み。盲。入。と。い。ふ。あ。り。ふ。ら。う
 牛坂の仇撃

次の日本三紫二郎勃ひ。其く。佐二郎が。異。あ。る。病。著。小。誓。に。あ。や。し。と。枕。方
 ら。く。居。ら。う。く。病。を。伺。ふ。佐。二。郎。や。う。や。身。を。起。せ。ど。も。あ。の。二。人。と。さ。ら
 と。か。あ。い。ど。り。と。さ。の。み。の。曉。小。奥。小。野。尻。の。家。と。出。る。と。死。せ。し。腹。痛。さ。り
 ぐ。登。不。至。う。く。顔。不。眼。眩。く。夜。中。病。刺。く。あ。り。く。殆。死。ぞ。う。い。は。じ。ぐ。
 ら。ふ。い。心。持。も。清。く。あ。ら。う。く。只。眼。中。の。痛。と。甚。し。と。い。何。と。い。ふ。病。あ。ら。ん
 い。と。不。審。も。ん。と。い。ふ。小。誓。三。の。紫。二。郎。と。顔。う。ら。え。め。い。く。頭。あ。ら。う。く。い
 や。う。あ。ふ。お。ぬ。い。さ。う。く。程。も。あ。ぬ。ふ。や。ひ。ひ。あ。ら。う。く。さ。あ。そ。ゆ。う。く。い。は。せ
 ら。め。今。あ。ら。う。あ。ら。う。あ。ら。う。あ。ら。う。と。れ。い。子。の。今。茲。夢。と。う。ん。べ。漁。獵。し
 羊魚のさう焼あり。とれ。さ。う。べ。く。食。つ。れ。あ。ら。う。く。さ。う。出。せ。は。佐。二。郎。ハ
 厚好意とらう。と。い。ひ。ゆ。え。汀。井。家。鶏。と。ほ。び。く。引。め。い。し。又。玉。の。方。が
 汀井が。娘。と。い。ひ。稱。く。さ。の。み。ふ。ら。う。重。三。が。信。や。あ。り。し。も。あ。ら。う。く。ふ

丹波國水上
禪小あり丹
儀著唐四回
の境あり

空海
依伯氏四公
の男母ハ阿形
氏小字ハ貴物
兼和二年月
廿一日高野山
大師と諡ハ
淳和天皇
入皇五十三代
日本子孫
於唐事

白雲石ありしを。近く立ち行くに。杜鵑売踏などの機著なる。牛の
腹ともげ去れんとる。七字の梵字あり。又漢字あり。天長二年二月某
日丹波國篠が峯ある石牛を鎮じ空海と彫りけり。巴打井いと告ぐ
。縁故石審く。佐二郎小如此の事を告ぐ。以有への山の麓ある
生とあり。はりの縁起あり。らん。をいふ。故ふやと向ふ佐二郎件の
牛石と扱ふ。し。げふ。る。あり。り。の。牛。石。の。る。必。忘。と。る。
古老掌傳ふ。の石大古の時よりあり。深山の石小貝の著る。とり
。へ。大古のむ。ら。海。み。く。や。り。ん。と。い。り。あ。る。小。淳。和。天。皇。の
天長年中。この牛石猛小神入り。夜ま。御小出。田圃を荒さ。り。大
。と。御。入。と。を。慈。ひ。く。析。標。さ。や。ぶ。ふ。さ。と。を。験。し。弘。法
大師。よく。ら。夜。遇。り。ま。ふ。ふ。と。清。度。と。を。し。小。大師。諾く

事類
郡書纂要
小云時曰早鬼
為鬼方有
鬼長三尺見
覺主大早
早鬼のいなり
の鬼あり

遠小石牛を法多ひし。ふ。の。牛。め。る。入。出。荒。ると。な。し。の。と。大師。宣
く。汝。今。今。の。の。め。と。牧。と。し。牛。馬。を。養。ひ。の。石。を。崇。め。り
。牧の守護神とせ。ち小利あり。の。を。天。災。疾。病。祈。ふ。と。ら
。靈。驗。あ。る。べ。し。と。訓。め。ひ。し。と。あ。り。し。り。以。來。早。魃。水。損。小。必
。と。の。石。と。あり。み。と。と。唐山の春牛圖朝の土牛童子小擬。く。福
と。求。ふ。冥。驗。誓。の。物。小。應。と。ら。牛。馬。又。年。小。延。と。ち。小。回。小
。利。以。と。小。至。る。み。併。大師の遺教ふ。と。り。と。と。の。如。當。初。の
。篠。が。峯。小。屬。せ。し。と。牛。坂。嶺。と。稱。と。め。し。弘。法。大。師。石。牛。法。法
。ふ。小。起。と。と。り。と。今。の。牛。石。小。構。と。大師の冥助と仰む。や。と。い
。巴。打。井。と。く。信。と。發。し。か。ら。の。あ。る。あ。と。く。ら。も。妙。え。と。ら
。小。企。と。も。詣。つ。た。小。か。ら。び。も。あ。ふ。ら。し。り。大師の導とめ

そのいりて

前巻

佐々木 夫物
 牛石の辺
 常記法師
 眼病の
 各方を
 口傳せし



前編



七の巻五

十五

三目

五牛童子
 古実之公事
 根元之大事
 の日陰陽師
 五牛童子
 立三三慶雲
 二年小天下
 疫病うつり
 うりしむ土
 牛とつらり
 道徳といふ
 是喜式
 土偶人十二
 放高各二尺
 土牛十二頭
 云云
 離婁
 離婁いつふ

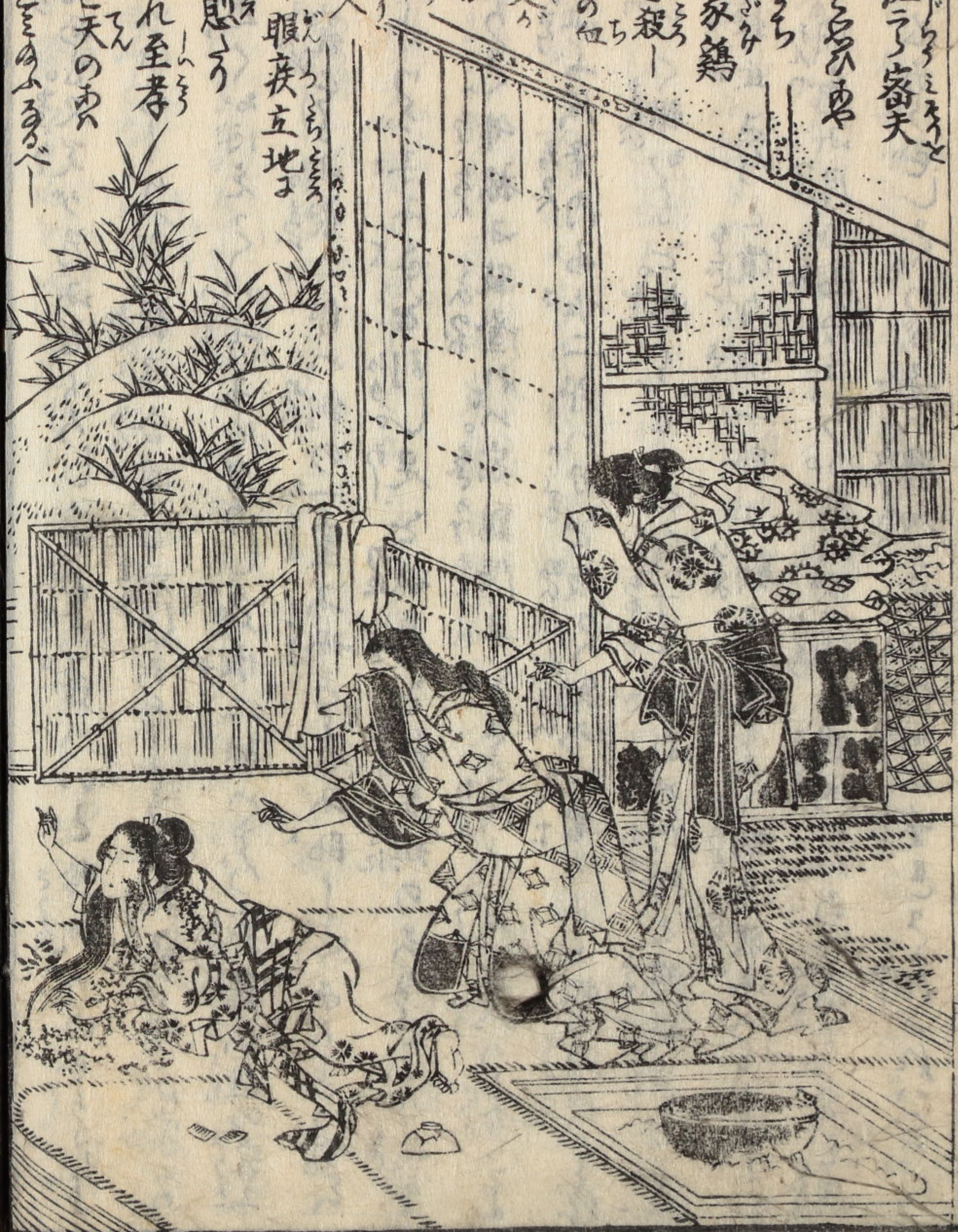
ことかおし。さうとく夫婦石湯と揃く激だ。りうとも小牛石とあし。心中小弘法大師と祈念し。只顧眼病平愈と祈ると更ふ他ふまへ。かくて江井の夫と扶引く。さうくも家路小ぬらふ山の半腹ふと。と見え入りく。兄ちわうさ止ば眼と患ひふふこそ。それへ近曾毒ふ中ふふく。費しし病なり。その毒を腹さるふ多かうざる故。命と預さふ至らむといふも既小脾胃損せし。かく盲とありあひぬ。究く難病ふし。醫療施くがし。り。酉の年月日時三ツまぶ。けひくせれ。うら女の童の。いも。男さぶ。心の腹の血とさうて。その眼とあり。立坊ふりの眼視る。離婁ふも勝るべ。是鶏の天明と告く。東天紅と鳴りの心ひかの精ふし。その色赤く。警を周夜

小眼明ら
 ありのま
 子離婁
 離婁が明公
 輪子巧也
 規非と以せ
 され方
 成工
 云云
 東天紅
 紅或の元
 俗傳と
 の曉
 六文未詳

成く鶏明ふあふが。ふれと用ると。たの功験候とるし。まそれと絶く。けり奇業も。法ありといふも用る小使る。さうとく。いひく。けり。さうり。位二郎夫婦へ。とと。少く。ちふ怪く。江井の。と。同ん。と。見え入り。ふ。往方も。なり。けれ。怪く。被旅僧へ。弘法大師の化身と。おら。と。或の。或の。か。と。ま。と。さ。作二郎も。と。得。い。の。母。九郎。信。待。せ。し。と。毒。殺。せん。あり。それと。く。當。夜。彼。が。魚。屋。の。鹽。魚。え。と。あ。ん。と。く。ら。う。う。市。小。出。と。く。消。不。毒。を。買。ん。と。く。あり。ん。と。と。食。が。乱。入。く。わ。り。啖。ひ。し。後。よ。それ。僅。小。飲。と。未。盡。小。過。され。幸。小。命。を。損。さ。る。脾胃。と。敗。く。盲。と。る。の。心。ひ。か。の。精。ふ。し。その。色。赤。く。警。を。周。夜



佐了密夫
 とらふ也
 家鶏
 を殺
 父
 眼
 中
 入
 眼疾立地
 愈
 これ至孝
 を天の
 此のふるべ



このゆゑに巻五

廿

前

首足の如く
異みせん
家傳傳云
首足門と異
ふしと出又
家語不傳儒
と斬くの足
と異みせ

細ぶのどさく著又佐太夫と殺せしりのへ故と繼母の西為くと爰の
ありしと死小借く〜れど。あなぞ難病小係りしうへふもぐの黙止る
あなぞ首伏せよ。いやとへ首足の如くと異みせん。いややうふと責
問小法九郎匡ととゆ。豫と朝坂と密通く。そのひ路めと佐太夫
と殺し。人小疑れじと。蛇小喰れ。る怖みえせらる。まぐとちりあく
首伏せ。結知小空三葉二郎亦朝坂が首と切く。此のうらふつゝのれ
三四人のと兒とねく走あり。佐二郎亦斬く。りりるへ波九郎村
長とあり。師門領主とありしより以来郷人と寛々と大とあつひ爰
とあり。民とる恨と舎とふじ。あつる小舊の領主秋光朝臣の奥方
ひ。ひ身が舎をなると獲覚波九郎討ふとしく向ふとや。吾們を
を救ひまぬらせんと議とる。おしと。波九郎が家の酒食と棄入ふ

とる十人のと食。六人への夜暴死し。酒と嗜ざりし四人へうらうと
恙ありゆめゆと。迷恨するこまれども。と索見のふし。ふ村長と理
非と論むるところ。吾侍が波九郎をおんとする計較ありと。さく。
ふ止にま〜共小朝坂を殺し。手への寛と雪げり。又のさつり。
と見ホが。波九郎が家小乱妨し。ひ身を斬く。り。ま。と。ひ。身。成
付ひゆく途中あり。柴二郎亦示くありし。と見ホとさうらひし。ま。つ。
せとせらる。への故へ朝坂波九郎亦昔ひ身と追出さし。市太夫ぬしと
殺し。今へ憚る。りのしと。あ。と。ら。ふ。ひ。身。の。なり。む。め。を。を。は。必。む。
殺さんと謀るべし。ま。ま。あ。ひ。身。虚。と。彼。知。小。あり。と。ま。好。計。小。ふ。ざ。り
あ。ん。と。踏。ま。あ。ら。と。ま。が。小。親。子。の。美。あ。と。の。り。明。白。小。へ。告。げ。り。
さ。く。と。と。見。ホ。と。さ。の。し。と。彼。家。小。乱。妨。さ。し。ひ。身。一。夜。も。雨。り。り

そのしやう

七三

前



山崎の

十六



佐二郎
父の仇を
殺す
玉の方の
供へ
足籠へ赴く

七の巻五

七五

口牛後
史記小室
鶏口世為牛
後云
これ蘇秦趙
蕭伊の説の
言事入りて
鶏口の口小
食と事
後大と
ふも真と
と蓋禁止の
事あり

砕散す。裡より一石の石碑あり。ふれと見えり。奇異の事なり。引起しく碑の面をみる。東嶺小鶏口と瘞北坂小牛後。棄りと彫る色し。佐二郎と云。堂と丁とあり。弘法大師。西百餘年のいし。ワガ為ふらの碑を造り。石牛の腹に遺ゆ。東嶺小鶏口と瘞と。東の嶺小鶏口と瘞とあり。又北坂小牛後と。棄ると。洪太郎朝坂の屍と北の坂に棄ると。常言小室鶏の口と。牛の後と。あると。ありと。いへり。家鶏と鶏の口とし。朝坂洪太郎。鳴呼奇事なり。奇事なり。と稱賛しく。己がれ。衆皆か。遂小東の嶺小鶏が。散と。葬北の坂に。朝坂洪太郎の屍。埋ぬ。く。い。あり。郷人の口。頂小牛坂。巔と。牛。裂。巔と。緯。号し。東の

北田前川
の二子牛
嶺の辰巳
嶺より岩屋
山。柏原小
と。水。上
郡。小。川

丹波の御名
小川の川
下をまぐ
群と稱す
新流より
と。流。す
と。流。す
と。流。す

嶺と鶏の口北の坂と牛の後と。む。び。り。を。かく。く。佐二郎。玉の方と。何地へ。落。く。や。わ。す。べ。ら。と。棧。さ。る。小玉の方。宮。ひ。り。り。師。川。が。采。地。小。湊。く。園。部。氏。の。知。と。り。あり。と。少。く。頼。胤。の。又。兵。部。尉。と。り。大。秋。光。朝。臣。と。い。ひ。し。莫。逆。の。友。多。り。し。小。女。児。薄。雪。が。緑。し。緋。と。り。と。少。く。と。い。ふ。と。彼。知。ふ。ゆ。え。と。頼。胤。と。宣。へ。ば。杏。三。柴。下。り。と。い。ふ。小。川。や。宣。ふ。と。園。部。君。の。采。地。へ。の。水。上。郡。の。り。も。あり。く。北。和。田。の。東。前。川。と。り。川。を。境。と。り。川。の。東。岩。屋。山。り。相。原。の。り。り。船。井。郡。園。部。の。郷。小。至。る。と。く。ま。彼。君。の。采。地。あり。師。川。の。地。の。領。主。と。り。し。り。以。来。園。部。氏。と。睦。ま。り。と。り。互。に。通。路。を。塞。ぐ。農。民。と。い。は。む。是。彼。交。加。と。い。ふ。許。を。あ。ら。と。い。は。む。小。湊。川。の。磯。砂。と。い。は。む。歩。了。り。し。と。園。部。小。至。る。と。い。は。む。

も師門が悪政を物うくさふり既み久し。ねどくへ今より彼地小箱
 まく長く仁義の民とあるべし。傍の人道の知つふまらうんとつへ玉の方
 へさうん佐二つうく終びく。まが四人の乞見小物とせむとせられが
 るる欣然としくうとせ受某亦既み寛と雪ふんば身の暇と多
 うべしとやう。おのうやにく走まれば佐二郎夫婦亦三柴二玉の方
 を扶引北和田の東み至る小前川の浪高くしう。輒く波づきとあう
 ぞ。こいふせんと滑踏玉の方懐中より書写の経文ととり出し。
 清水寺の親世音并み高野山弘法大師と祈念し。彼経ととら
 く川へ丁と投へとさふ不思扱あるる。まうく川水の減るる日
 五尺小及べり。あの特とえくまうと勇ざらん。佐二郎は玉の方
 と負やりせ一番み川と波せば亦三柴とつへ打井と扶く引

續く渡りり。あをえく彼邑の農夫やうく羨み。俄頃み妻子と携うく
 川とつし。園部みゆまの影ありうされば佐二郎が一番み渡りしを
 今も前川の南の嶽を佐二川と稱るとも人畢竟玉の方園部小到り。
 薄聖娘三因み賣られく。つるまうあゆ。ま後篇五冊と續めくまらん。

ゆに前篇卷五をう

巻五

無事



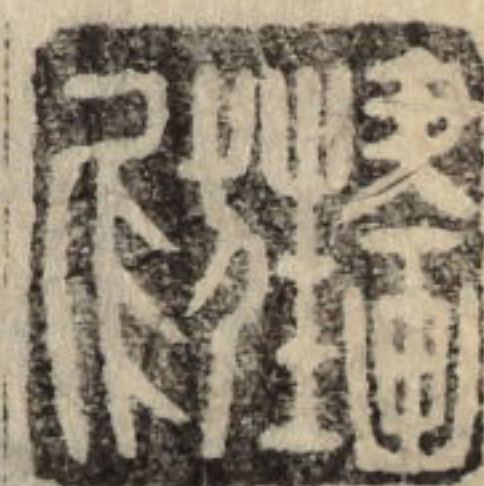
作者

曲亭馬琴



畫工

葛飾北齋



副人

酒井永輔

水滸画傳

初回より十回まで
十一冊出来

文化四丁卯年春正月發兌

書林

江戸鞠町平川町二丁目

角丸屋甚助梓

和漢
西洋

書籍賣捌處

大阪心齋橋博労町角

群玉堂河内屋

岡田茂兵衛

